

〔資料〕

## 慢性の病いにおける事例研究法とライフストーリーインタビュー法の 意義と方法についての論考

黒江 ゆり子 藤澤 まこと

### Discussion on the Significance of the Case Study Research and Life Story Interview Method in Chronic Illness

Yuriko Kuroe and Makoto Fujisawa

#### I. はじめに

慢性の病い (chronic illness) は、長期にわたる病気管理が必要となり、人々は、食事や運動、あるいは薬物療法等の多様な療養法を個々の日常生活の中で継続することが求められる。しかしながら、日常生活における療養法の継続は、仕事や学業や地域活動、家族関係や職場の人々・地域の人々との関係、あるいはその中で渦巻く多様な感情等、日常生活自体がさまざまな事柄で構成されていることから、計画どおりに進めようとしても困難を伴うことが多い。

看護職者は、日常生活における療養法を継続できるように支援することが求められるが、それは個々の対象の生活や人生をふまえた支援となり、個別性をどのようにとらえ、どのような支援計画に繋げるかが重要となる。そこで、対象の生活や人生をふまえた支援を現実のものとし、その質を高めるためにはどのような取り組みが可能なのかについて、今回は、まず慢性の病いの特性を確認し、次に人々の生活や人生にアプローチする質的な事例研究法 (case study research) を繙き、さらに、このような事例研究法の中で多く用いられているインタビュー法の在り方を思索し、看護学における意義を考えてみようと思う。

#### II. 慢性の病いの特性

慢性の病いは、病気管理のために必要な事柄を生涯に亘って続けることが必要となるが、たとえば糖尿病の領域等では、合併症予防のためにも毎日の食事や運動を自己の身体状態に合わせて調整することが求められる。それらは

個人・家族の生活習慣と繋がっていることが多く、また私たちは多様な社会生活を営んでいることから、日常生活の中のそれらの継続は容易ではなく、病気管理の必要性を理解していても継続できないことも多い。

病気に伴う病気管理の必要性が理解されているにもかかわらず日常生活の中で実践が継続されないことに関して、わが国においては1980年代にセルフケアやソーシャルサポート等の概念、1990年代にコンプライアンス等の概念が欧米より取り入れられて支援が実施された。また、一層充実した支援に繋げるために1990年代後半には対象者の心理社会面を理解する必要性が指摘されるようになり、医療職者の指示に従うという意味が包摂されるコンプライアンスに代わって、個人・家族の主体性を重視するアドヒアランスの概念や、パワレスネス (無力感) の状況を取り除くことに基盤をおくエンパワメントの概念、及び個人・家族が物事に取り組むときの自信を支えようとするセルフエフィカシーの概念等を活用して対象を支援しようとする工夫がさまざまに行われた (黒江, 2002)。

さらに、これらの概念を経て、個人・家族の心理的状況のみならず、社会における療養環境を整えることの重要性が示唆されるとともに、個人・家族の現在の心理的状態は、病気とともにある自己のとらえ方やそれまでの病いの経験等に繋がっていることが指摘されるようになった。すなわち、現代社会の人々の生活に目を向け、対象者を「生活者」として捉えることの重要性や (河井, 2006)、個人史や生活史及びライフストーリーの考え方 (黒江, 2006) が重要であ

るとの認識がされるようになり、個人史を基盤とする病みの軌跡の考え方や病気の不確かさ理論等が臨床に活用されるようになった。また、個人史やライフストーリーを把握するには、個人・家族の語りに耳を傾けることが重要であり、個人・家族が自分たちの思いを語れる環境を整えようとする努力が行われるようになった。

### Ⅲ. 慢性の病いと事例研究法

看護学は看護実践を基盤として成り立つ学問であることから、対象に関する事象を看護学的にどのように捉え判断するか、その判断に基づきどのような看護を提供するか、そして対象にとっての看護の効果は何であるか等について、綿密な記述データに基づいて分析し、実践知として積み重ねていくことが重要となる。それは、看護学を基盤として創生されるケアが、対象の健康生活に向けた支援であり、その個別性を尊重し、個々の状況に応じたケアが考案されてこそ価値をもつからである。

複雑な日常生活の中での病気管理が求められる慢性の病いにおいて、対象者に必要とされるケアは、個別の状況に応じたケアであり、その計画・実施・評価の過程においては、対象者の状況を包括的に把握しながらすすめ、状況の変化に合わせた修正を継続することが重要となる。そのようにケアの質を高めるには、個々の具体的な状況に焦点をおいて考え、省察することのできる事例研究法がその基盤となり得る可能性をもっている。

事例研究法は、わが国においても1970年代より看護学

の中で用いられてきた研究法であるが（武谷, 1976）、その後1980年代の量的研究、質的研究の発展に伴い研究法としての意義が明確にされずに今日に至っている。その一方で欧米では、質的研究の発展に伴い、事例研究法が質的研究法の一つとして見直され、1990年代になると、R.YinとR.Stakeが、経験的アプローチとしての立場あるいは社会科学としての立場から事例研究法(case study research)についての多くの論文を発表している。それは、新しい時代における事例研究法の意義と方法についての新たな提言であった（黒江, 2013）。

Yinは、1994年当時に社会科学的研究において広範に用いられている事例研究の理解が十分でないことを指摘し、厳密な事例研究法を行うための指針を示す目的で著した。その一方で、Stakeは、質的研究を行うためのもっとも一般的な方法の一つとなってきた事例研究法は、方法論的な選択ではなくて、何が研究されるべきかという対象の選択であり、事例は分析的あるいは総合的に、全体的あるいは解釈学的に、組織的あるいは文化的に、そしてまた、それらの方法を複数用いながら研究することが可能であるとの貴重な指摘をしている（黒江, 2013）。その後、Edgren (1998)、Lovell (2006)、Ahlström (2010)等がYinあるいはStakeの考え方に基づいて事例研究を進め、心筋梗塞や自傷やうつ状態等における長期に亘る人々の状況やケア提供について報告している。また、わが国においては2000年以降に心理学の領域にて山本らが、新しいアイデアを抽出するプロセスとしての事例研究法の意義を提示している（山本

表1 事例研究法についての考え方

著者	考え方・意義	分類	概要
Yin1994/ 近藤 訳 2011	事例研究は経験的探究であり、その現実の文脈で起こる現在の現象を研究する。	説明的事例研究	「どのように」「なぜ」という問題が提示されている場合
		探索的事例研究	研究者が事象をほとんど制御できない場合
		記述的事例研究	現実の文脈における現在の現象に焦点がある場合
Stake2000/ 油布 訳 2006	事例を通した他者の経験の追体験は、人が行動を選択したりその結果を予期することを改善するために重要な基盤となる。	本質的 / 個性探究的事例研究 <sup>*註①</sup> (intrinsic)	研究者が終始一貫して、ある特殊な事例をより深く理解したいという思いから一つの事例に着手した場合。
		手段的事例研究 (instrumental)	ある問題に関する洞察や一般化を導くため、特殊事例の研究。日常的活動は詳述されるが、事例そのものとは離れたところにある関心事が追究される。その場合の事例は、他の諸事例の中の典型的なものとは見なされることがある。研究者は、特殊性と一般性をめぐる複数の関心を同時にもつため、手段的事例研究から個性探究的な事例研究を厳密に区別することは難しい。
		集合的事例研究 (collective)	特殊な事例について、その個性を探究することにはほとんど関心がなく、現象や母集団や一般的状況を研究するために複数事例を研究する。複数事例に拡大された手段的研究。
山本・鶴田 2001	臨床現場という文脈で生起する具体的事象をなんらかの範疇との関連において構造化された視点から記述し、全体的にあるいは焦点化して検討し、新しいアイデアを抽出。	事例の全体像の本質に迫る事例研究	一つの事例の全体像の本質を詳細に書く記述する方向で進める。
		事例の特性の側面に焦点を合わせる事例研究	事例のもつ特性の側面に焦点をあわせて、研究に不可欠な「重要な事実」のみに限定する。

表2 事例研究法における二つの姿勢

二つの姿勢	概要	例
事例そのものに包摂される特性に目を向ける姿勢	説明的事例研究と記述的事例研究 (Yin, 1994) 本質的 / 個性探究的事例研究 (Stake, 2000) 事例の全体像の本質に迫る事例研究 (山本, 2001)	慢性の病いとともにある Aさんと家族のこれまでの経験を描き、そこから看護のあり方を考える。
事例から導かれる特定の事柄に目を向ける姿勢	探索的事例研究 (Yin, 1994) 手段的事例研究と集合的事例研究 (Stake, 2000) 事例の特性の側面に焦点を合わせる事例研究 (山本, 2001)	慢性の病いにおける他者への「言いつらさ」を複数の事例の経験から導き、看護のあり方を考える。

ら,2001)。これらの人々の貴重な提言を次に紹介しよう。

### 1. Yin と Stake と山本らの考える事例研究法

Yin (1994) が考える事例研究法は、経験的探究の独特の形態であり、特に、その現実の文脈の境界が明確でない場合には、その現実の文脈で起こる現在の現象を研究するものであるとされ、表1に示すように、事例研究法が望ましい研究方略となるのは、「どのように」あるいは「なぜ」という問いが提起されている場合（説明的事例研究）、研究者が事象をほとんど制御できない場合（探索的事例研究）、そして現実の文脈における現在の現象に焦点がある場合（記述的事例研究）であると示されている。文書・インタビュー・観察等多様なデータ源が活用され、事例研究者に必要な技能として、a. すぐれた‘問い’と結果の‘解釈’ができること、b. すぐれた‘聴き手’であること、c. 適用性と柔軟性があること、d. 研究中の課題を的確に把握できること、e. あらかじめ想定した見解に‘偏らない’ことが求められるとしている。また、2009年には事例研究法におけるインタビュー法について具体的に説明している (Yin,2009)

また、Stake (2000) の考える事例研究法は、3つの類型があるとされている。本質的 / 個性探究的事例研究は、研究者が終始一貫してある特殊な事例をより深く理解したいという思いから一つの事例に着手した場合であり、事例そのものが、その固有性と常態において関心がもたれ、事例の中で動いている物事をめぐる物語に集中する。また、手段的事例研究は、ある問題に関する洞察、あるいは一般化を導くために、特殊な事例が研究される場合であり、そこにおける日常的活動は詳述されるが、事例そのものとは離れたところにある関心事が追究される。その場合の事例は、他の諸事例の中の典型的なものとなることがある。研究者は、特殊性と一般性をめぐる複数の関心を同時にもつため、手段的事例研究と個性探究的事例研究を厳密に区別することは難しいとされている。

集合的事例研究は、事例の個性を探究することにはほとんど関心がなく、現象や母集団や一般的状況を研究するた

めに数多くの事例を研究するものであり、複数事例に拡大された手段的研究であるとされている。その上で事例研究法のプロセスとして、事例をどの論点なら、出発点となる関心や中心テーマを生み出せるか、また、その事例を最大限に理解するために、どの論点ならこの事例ならではの固有性を発見できるかを問うとする。事例を通した他者の経験の追体験は、人が行動を選択したりその結果を予期することを改善するために重要な基盤となることが指摘され、事例研究の意義が示されている。

さらに、わが国において山本ら (2001) は、臨床の事例研究とは、臨床現場という文脈で生起する具体的事象をなんらかの範疇との関連において構造化された視点から記述し、全体的にあるいは焦点化して検討を行うことで新しいアイデアを抽出するアプローチであると述べている。事例研究には二つの方向性があり、一つの事例の全体像の本質を詳細に厚く記述 (thick description) する方向と、事例のもつ特定の側面に焦点をあわせて、研究に不可欠な「重要な事実」(material facts) に焦点をあてて検討する方向があると指摘する。その上で、事例研究の意義は、稀有な事例であろうと代表的な事例であろうと、その事例を明示することによって、読み手の中に類似の状況が想起され、拡がりをもつという点に意義があると示している。

### 2. 事例研究法における二つの姿勢

Yin と Stake、及び山本らの考え方は相互に類似性がみられる。Yin の記述的事例研究や Stake の本質的 / 個性探究的事例研究は、山本らの‘一つの事例の全体像の本質を詳細に厚く記述する’方向をもつ事例研究との類似性がみられ、探索的事例研究や手段的事例研究は、‘事例のもつ特定の側面に焦点を合わせて重要な事実に限定して検討する方向をもつ事例研究と類似性がみられると考えることができる。

すなわち、事例研究法には表2に示すように、事例そのものに包摂されている特性に目を向ける方向と事例から導かれる特定の事柄に目を向ける方向の二通りの姿勢が可能で

あると思われる。この二つの姿勢はどちらも、私たち看護職者が看護実践の質の向上を考えるときに、そこに著わされる事例から極めて多くの示唆を得ることができるであろう。たとえば、事例そのものに包摂される特性に目を向ける姿勢の事例研究では、慢性の病いとともにあるAさんと家族のこれまでの経験を描き、そこから看護のあり方を考えることが可能であり、また事例から導かれる特定の事柄に目を向ける姿勢の事例研究では、慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を複数の事例の経験から導き、看護のあり方を考えることが可能となる。

さらに、これらの事例研究法には、人々の生活や人生についてのその人々の語りが多分に含まれ、それらは人々が自由に語ることでできるかたちのインタビュー法を経ていることが多い。たとえば、精神領域において病院から地域施設に移る人々の体験を明らかにすることを目的としたNorman (1990)の研究 (qualitative case study 質的事例研究法)では非構造化インタビュー法が用いられ、病院から地域施設に移った長期入院精神疾患患者10人にインタビューが行われている。また、嚢胞線維症の子どもをもつ家族を支える看護の機能について明らかにすることを目的としたWhyte (1992)の研究 (longitudinal case study 長軸的事例研究法)では、嚢胞線維症の子どもをもつ4家族へのインタビューを含む事例分析が行われている。さらに、心筋梗塞回復期にある患者への病院におけるケア提供システムについてサービスマネジメント理論の観点から分析することを目的としたEdgren (1996)の研究 (case study 事例研究: Yinに基づく)では、心筋梗塞患者4人と病院スタッフ8人にインタビューが行われている。事例研究法においては、事例が個人・集団・組織のいずれであっても(註②)、その人々の語りを聴くインタビュー法を用いることで、事例の状況をより細やかに捉えることができると考えられる。そこで、研究手法としてのインタビュー法の中から、今回は人々の生活や人生の語りを深く聴こうとするライフストーリーインタビュー (life story interview) 法に焦点をあて、慢性の病いにおける個々の状況を捉える方法とケアについてさらに考えてみようと思う。

#### IV. 慢性の病いにおけるライフストーリーインタビュー法

##### 1. ライフストーリーインタビュー法の考え方

ライフストーリー (life story) インタビュー法は、ライフヒス

トリー (life history) インタビュー法とともにナラティブインタビューの代表的方法とされている。これらは人生の語りを聴く方法として類似する部分が多いため、誰の考え方に依拠するかが基盤となる。今回はR. Atkinsonのライフストーリーインタビュー法に焦点をあてて考えようと思う。

Atkinsonは1990年代後半から多くの論文を発表しており、彼の考え方はその後のMcNultyやKeadyやLehna等の論文に影響を与えている(黒江, 2011a)。ライフストーリー (life story) に対する彼のアプローチは、自然主義的な立場とパーソンセンタードの観点に立ち、ライフストーリーとは、「生きてきた人生を語ることを選択した人が、できる限り完全にかつ率直に語った物語」であり、多くはそれを思い出すこと、及びそれを知るための他者によって行われるガイドされたインタビューの結果として語られるとされている。得られたライフストーリーはその人に起こったことのナラティブな本質であり、誕生から現在まで、あるいはある時点の前後を網羅することが可能であるとされている (Atkinson, 2002)。

このようなAtkinsonの考え方は、たとえば、Keadyら(2007)が依拠した「個人史 (autobiography) とは、一貫性がなかったり矛盾があったりする人生を全体として捉える、あるいはその主要な部分を捉えるものであり、それは人生のパターンや経験や意味が現れることを可能にするナラティブ変換を探ることの中に在る。」という個人史に関する考え方と調和する等によって、多くの人々に影響を与えている。Keadyらは、これらの方法を用いることにより、認知症の母親をもつ家族介護者(娘)と、その家族介護者にケアを提供した認知症ケアの専門看護師の語りから、母親の認知症に伴う経験の旅を著し、専門職がケアを組み立てるには、認知症ケアに携わる家族介護者の個人史をふまえて組み立てることが重要であると指摘している。また、McNulty (2003)は読字障がいに関する体験、Lehna (2009, 2010)は重症熱傷に関する体験をこのインタビュー法により描き出している。

Atkinson (2002)は、慢性の病いをもつ人々の人生やその人の周りの人々との関係についての経験を理解するには、その人々の声に耳を傾け、その人々自身のことを自身のために語ってもらうことが重要であり、個人の認識について知るためには、その人自身の“声”以上に良い方法はないと指摘する。慢性の病いとともにある人生は長期に亘ることから、個人の人生を全体的に眺望することのできる視点から人々にストーリーを語ってもらうことは意義深く、それは時を

表3 R.Atkinsonによるライフストーリーインタビューの進め方

プロセス	焦点
第1段階：ライフストーリーインタビューの準備	自分の研究において、ライフストーリーがなぜ、どのように役立つかについて確認することを含む。
第2段階：インタビューの実施	人々に真実のストーリーを語るように依頼し、そのプロセスにおいて語り手を援助し、協力する（ガイドによるインタビュー・プロセス）。
第3段階：インタビュー内容に関するトランスクリプト作成と解釈	ライフストーリーを語るプロセスの中心は主観性であり、解釈を通して意味に到達する。トランスクリプト作業の目的は、ストーリーの語り手が用いた言葉にもとづき、伝えられた内容を捉えることである。聞き手の問いやコメントはトランスクリプトから除外する。語り手の言葉だけが現れ、文章となり文脈を形成する。文脈が形成されたライフストーリーを語り手に示し、読んでもらい、変更したい部分をチェックしてもらうことを通してライフストーリーが構成される。

註：Atkinson（2002）及び黒江（2011b）の文献を参考に作成。

越えて多様な経験を豊かに理解することでもある。また、それらは個人の世界の現実を構築するものであることから、私たちが支援を考えるとときに個々の状況に近づくことを可能にするものでもあろう。

2. ライフストーリーインタビュー法の進め方

それでは、ライフストーリーインタビュー法のプロセスについて、Atkinson（2002）の論述内容から紹介しよう。ライフストーリーは、定められた研究手法が用いられて重要なデータが集められる。同じ研究者が語り手を変えて異なる質問をすることもあり、また聞き手が異なれば質問も異なり、それぞれの研究の焦点に依拠する。ライフストーリーを語る人は、ライフストーリーの巧みな外形に加え、個人的な意味、記憶、自身の解釈を提供するとされている。ライフストーリーインタビューを行う私たちは、人々に真実の物語を語るように依頼し、そのプロセスにおいて人々を援助し、協力し、そのストーリーを多くの読み手に伝えることを試みる。

ライフストーリーインタビュー法は、表3に示すように3段階から成るプロセスをもつ。第1段階は、準備またはプレインタビューである。インタビューの準備、特にライフストーリーがなぜ、どのように役立つかを確認することが含まれる。第2段階は、インタビューを行うプロセスであり、録音等により記録しながら、ガイドによりライフストーリーが語られる。第3段階は、インタビュー内容を書き起こし（トランスクリプト）、解釈するプロセスである。インタビューにおける関心は、ス

トリーを語る人に向けられており、語られた内容を書き出す際には聞き手の質問や反復等は記録から除外され、その結果、語り手自身の言葉で語り流れ、繋がったものとなる。書き起こしたライフストーリーは語り手に示し、見てもらい、変更したい部分をチェックしてもらうことによって主観的反応、または妥当性のチェックの形態でライフストーリーに対する反応が得られる。すなわち、語り手の言葉だけが現れ、文章となり文脈を形成するところに特徴があり、語り手の人生や思いをより鮮明に描くことが可能となる。

V. 最近の研究を通して事例研究法の看護学における意義を考える

慢性の病いにおける事例研究法を用いた最近の研究を通して、看護学における意義をさらに考えてみようと思う。1990年代は、看護学において質的事例研究法（qualitative case study research）の概念が提示された時期であるが（黒江，2013）、それからおよそ10年が経過した2000年代において、Nilsson（2010）らは、自宅療養をしている重症慢性疾患患者にICT（情報コミュニケーション技法）を用いたケアを提供した地域看護師の経験を事例研究法（Qualitative case study design 質的事例研究デザイン）にて明らかにし、看護のあり方を考察している（表4）。また、Eisenhauer（2010）らは、僻地に住む高齢女性のライフストーリーを僻地文化との関連をふまえて描くことを目的に、1924

表4 慢性の病いにおける事例研究法から学ぶ

著者（報告年）・研究目的	研究法	事例	結果
Nilssonら（2009）目的：自宅療養の重症慢性疾患患者をICTを用いてケアをしている2人の地域看護師の経験を記述する。	質的事例研究、半構造化インタビュー	地域看護師2人、自宅療養者2人	地域看護師はICTを用いることで、対象との直接的なコミュニケーションが高まり、深い相互の信頼関係を構築するに繋がる。
Eisenhauerら（2010）目的：僻地に住む高齢女性のライフストーリーを僻地文化との関連をふまえて描く。	case study, 非構造化インタビュー	僻地に住む高齢（83歳）女性1人	誕生時から現在までのライフストーリーの中に69歳での病気発症が含まれ、その後も家族や友人と親密な関係の中で生きている女性の姿。ヘルスケア提供者は僻地文化の中で人々は生きているというポイントを長軸的な視点で捉えることが重要である。
Kaşıkçı（2011）目的：COPDとともにある対象にセルフエフィカシー理論を基盤に健康教育を行い、効果を把握する。	A case study, 質的事例研究、インタビュー、1年間のフォローアップ	COPDをもつ55歳の男性1人	健康教育前の男性は、日常生活における呼吸困難への対応の困難さを表出していたが、健康教育後は呼吸困難への対応に自信を抱いていた。当該理論に基づく健康教育は対象のセルフエフィカシーを高める。

年に生まれた時から83歳の現在までのライフストーリーの中に69歳での病気発症を含めて示し、病気発症後も家族や友人と親密な関係の中で生きている女性の姿を描いている。そのライフストーリーを踏まえ、ヘルスケア提供者は僻地文化の中で人々は生きているというポイントを長軸的な視点で捉えることが重要であると指摘している。さらにKaşıkçı (2011) は、COPDをもつ事例のセルフエフィカシー理論を用いた健康教育を50歳代男性に実施し、1年間の経過を報告している (a case study 一事例研究)。

これらの報告は、事例研究法を用いることで、長期間に亘る個々の生活や生きることの姿、及び他者との繋がりを描くことを可能にしている。また、「事例そのものに包摂される特性」に目を向ける姿勢の事例研究と「事例から導かれる特定の事柄」に目を向ける姿勢の事例研究という視点から見ると、Eisenhauerらの研究は、僻地に住む女性に高い関心を寄せ、事例そのものに包摂される特性に目を向けており、Nilssonらの研究とKaşıkçıの研究は事例から導かれる特定の事柄に目を向けていると考えられる。これらから、看護学研究においては、この両者の姿勢が可能な事例研究法を研究課題に沿って選択し、事象を追究していくことが重要になると考えられる。さらに、慢性の病いにおいて人々の経験をふまえたケアを組み立てるためには、生活や人生の語りを可能にするライフストーリーインタビュー法等のインタビュー法を含む事例研究法であれば、個々の生活や人生を捉え、看護のあり方を深く考えることが可能となり、質の高いケア提供に繋がることが期待できる。それは、事例研究法において指摘されている「厚い記述」と「重要な事実」を導くものでもあろう。

## VI. おわりに

慢性の病いにおける事例研究法とライフストーリーインタビュー法について考えてみた。私たちの日常生活は複雑性に満ちており、その中で生活している具体的な姿を描き出すことはなかなか容易ではない。しかしながら、生活者として対象をとらえ、ケアに繋げるためには、生活者の生活という事象を描くことが不可欠となる。看護学における、その可能性と方法については、今後も検討を続けたいと思う。

\*註①：intrinsic case studyは、油布の訳では個性探求的事例研究とされているが、intrinsicの本来備わっている

という意味を鑑み、本論においては本質的/個性探求的事例研究として表示した。

\*註②：事例研究法 case study reseachにおける‘事例 case’のとらえ方には多様性があるが、多くの場合、個人・事象・実施過程・小集団・組織等、固有性をもつ単位として捉えられている。

## 謝辞

本論文は平成24年度～27年度科学研究費補助金「基盤研究(C)」研究課題番号24593223「慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』と看護のあり方を基盤とした理論の構築」の一部として論考を深めたものである。

## 文献

- Ahlström, B.H., Skärsäter, I., Danielson, E. (2007). Major depression in a family: what happiness and how to manage- A case Study-. *Issues in Mental Health Nursing*, 28, 691-706.
- Atkinson, R. (2002). The life story interview. in Gubrium JF., Holstein JA. ed., *Handbook of interview research: Context & Method* (pp. 121-140). Sage Publications.
- Edgren, L. (1998). Co-production - an approach to cardiac rehabilitation from a service management perspective. *Journal of Nursing Management*, 6(2), 77-85.
- Eisenhauer, C.M., Hunter, J.L., Pullen, C.H. (2010). Deep Roots Support New Branches: The impact of dynamic, cross-generational rural culture on older women's response to formal health care. *Online Journal of Rulral Nursing and Health Care*, 10 (1), 48-59.
- Kaşıkçı, M.K. (2011). Using self- efficacy theory to educate a patient with chronic obstructive pulmonary disease: A case study of 1-year follow-up. *International Journal of Nursing Practice*, 17, 1-8.
- 河井伸子, 中岡亜希子, 黒江ゆり子. (2006). 健康教育とクロニックルネスにおける「生活者」と「生活」を考える. *看護研究*, 39(5), 31-38.
- Keady, J., Ashcroft-Simpson, S., Halligan, K., et al. (2007). Admiral nursing and the family care of a parent with dementia. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 21(3), 345-353.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと, 普照早苗. (2002). 病の慢性性 Chronicityと個人史-わが国におけるセルフケアから個人史まで

- の軌跡. 看護研究, 34(4), 19-30.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと, 三宅 薫ほか. (2006). 看護学における「生活者」という視点についての省察. 看護研究, 39(5), 3-9.
- 黒江ゆり子, 實田穂, 藤澤まこと. (2011a). 慢性の病いにおけるライフストーリーインタビューから創生されるもの. 看護研究, 44(3), 237-246.
- 黒江ゆり子, 北原保世. (2011b). 慢性の病いとともにある生活者を描く方法とライフストーリーインタビュー. 看護研究, 44(3), 247-256.
- 黒江ゆり子. (2013). 時間的経緯を踏まえた看護学における事例研究法の意義に関する論考. 看護研究, 46(2), 126-134.
- Lehna, C.R. (2009). "Sibling closeness" a concept explication using the hybrid, in siblings experiencing a major burn trauma. Southern Outline Journal of Nursing Research, 9(4), 8.
- Lehna, C. (2010). Sibling Experiences after a Major Childhood Burn Injury. Pediatric Nursing, 36(5), 245-251.
- Lovell, A. (2006). Daniel's story: self-injury and the case study as method. British Journal Nursing, 15(3), 166-170.
- McNulty, M.A. (2003). Dyslexia and the life course. Journal of Learning Disabilities, 36(4), 363-382.
- Nilsson, C., Skär, L., Söderberg, S. (2010). Swedish District Nurses' experiences on the use of information and communication technology for support in people with serious chronic illness living at home - a case study. Scandinavian Journal of Caring Sciences, 24, 259-265.
- Norman L, Parker, F. (1990). Psychiatric patient's views of their lives before and after moving to a hostel: a qualitative study. Journal of Advanced Nursing, 15(9), 1036-1044.
- Stake, R.E. (2000/2006). 事例研究, in N.K. デンジン, Y.S. リンカ ン著, 平山満善 (監訳), 藤原顕 (編訳), 質的研究ハンドブック 2巻 - 質的研究の設計と戦略 -(pp.101-120). 北大路書房.
- 武谷久美子 (1976). 慢性疾患患者を自立の方向にうながすための看護面接による事例研究 - 慢性腎不全患者の場合. 看護学雑誌, 40(3), 238-251.
- Whyte, D.A. (1992). A family nursing approach to the care of a child with a chronic illness. Journal of Advanced Nursing, 17(3), 317-327.
- 山本力. (2001). 心理臨床家のための事例研究の進め方. 山本力, 鶴田和美 (編) (pp. 14-29). 北大路書房.
- Yin, R.K. (1994/2011). 近藤公彦 (訳), ケース・スタディの方法 (第2版), 千倉書房.
- Yin, R.K. (2009). Case Study Research: Design and Methods, (4th ed.), SAGE Publications.

(受稿日 平成27年8月31日)

(採用日 平成28年1月13日)